



社長×社員 スペシャル座談会

合併20年を越えて、 さらに強みを磨き、未来を切り拓く

地盤改良のパイオニアである不動建設と海洋・ブロック技術が強みとするテトラの合併から20年。不動テトラには苦難の時代を乗り越えながら、独自の強みと企業文化を育んできた歴史があります。合併当時を知る社員と合併後に入社した社員、そして奥田社長が集い、20年の歩みと未来への想いを語り合いました。

20年の歩みの中で培った強み

——合併を経験した皆さんは当時から現在までの歴史をどのように見えていますか。また、その中で培った経験は現在の強みにどのようにつながっていると思いますか。

田中 合併によって事業の幅が広がる一方で、実際に1つの会社として機能し始めるまでには相当の時間がかかったと思います。私は土木事業とブロック環境事業でさまざまな業務を経験してきましたが、合併当初はそれぞれの部門が自身の専門領域を中心に考えていたように思います。お互いが持つ技術やノウハウを積極的に活用しようとする動きはほとんどなかったのではないのでしょうか。変化を実感し始めたのは

この10年くらいです。「他部門の知見も活用してみよう」という考え方が自然になり、社員一人ひとりの視野も広がってきた印象を受けています。

林 全国の土木工事現場で働く中で、2社の文化や考え方の違いを実感する場面が多くありました。同じ土木事業であっても海上と陸上では仕事の進め方や現場運営の方法が異なります。当時若手だった私はその違いに戸惑うこともありましたが、今振り返ると、それが現在の強みにつながったと考えています。海上と陸上で分かれていた知見や組織が1つの会社の中で共有され、交わる機会のなかった技術が組み合わせることで、新しい価値が生まれました。これは他社にはない財産だと思います。

林田 私は合併後初の新卒社員として入社しましたので、最初から土木、地盤、ブロック環境という3事業が存在す

ることを自然に受け止めていました。不動テトラの価値は技術力だけではなく、複数の事業が連携しながら課題解決に取り組む総合力にあります。各事業が高い専門性を持ちながら必要に応じて協力する体制は、多くのお客さまから「一度に相談できる」「別の視点から提案してくれる」と高く評価されています。私は技術部門と営業部門を経験してきましたが、社内には多様な知見や経験が蓄積され、分からないことがあれば相談できる人がいます。合併によって得られた最大の財産は、人と人のつながりであり、事業領域の拡大が社員の可能性を広げていると感じます。

奥田 合併から今日までを振り返ると、「よくここまで来たな」という感があります。異なる会社と一緒にあったわけですから、合併当初は本当に大変でした。しかもその直後から建設市場が非常に厳しい状況となり、まさに苦難の時代を迎えました。そうした中でも地盤事業やブロック環境事業への投資を続け、東日本大震災の復旧・復興に全社で取り組んできました。あの頃の経験を通じて、不動テトラには社会に貢献する力があるということを社員みんなが実感したのではないのでしょうか。合併による効果は事業の足し算ではありません。それぞれの強みを掛け合わせ、新しい価値を生み出せる会社になったことが大きいと思います。20年という歳月をかけて築いたこの強みは、今後の成長に向けた大きな財産です。

——合併後に入社した皆さんはいかがでしょう。今の話を聞いて、不動テトラの現在の強みはどのようにして培われてきたと思いますか。

橋田 私も当社に3事業があることを特別なことだとは思っていませんでしたが、今の皆さんの話を聞いて、20年かけて築いてきた大きな財産であることを改めて実感しました。実際に本社や研究所で働く中でさまざまな部門の人と接する機会があり、異なる専門性を持った技術者が同じ会社の中にいることで、新しい発想や技術開発につながることがあります。これからは強みを受け継ぐだけでなく、つなぐことで新しい価値を生み出していく必要があります。

弘 私も他部門の技術者や営業担当者と関わる機会が多くあります。そこで感じるのは、不動テトラには1つの課題に対してさまざまな視点からアプローチできる強みがあるということです。合併の苦労や変化は経験していませんが、その過程で培われた技術や信頼、企業文化を受け継いでいることを強く感じます。人手不足や気候変動などの社会課題への対応が求められていく中で、当社が持つ技術や事業の強みはこれまで以上に真価を発揮するのではないのでしょうか。不動テトラの次代を担う一員として、その強みをさらに発展させていかなければと思います。

横路 中途入社者の立場から見ると、不動テトラには人を受け入れる文化があると感じています。会社によって人

に対する考え方が異なるように思いますが、不動テトラには、新しい視点や考え方に耳を傾け、「まずやってみよう」という企業風土があります。

林田 私が入社した頃と比べて、会社の人材に対する考え方は大きく変わりました。以前はまず仕事があり、その中でどう人が育つかという考え方が強かったように思いますが、今では一人ひとりの成長やキャリアをどう支えるかという視点が強くなってきています。教育制度の充実や挑戦する機会の拡大からも、社員を育てようという会社の本気度を感じます。

弘 女性技術者は以前より確実に増えてきています。働き方について相談しやすい環境も整ってきました。社員一人ひとりを大切にしようとしていることが伝わってきます。

奥田 私は以前からさまざまな分野の投資の中でも「人」への投資が最も重要だと考えてきました。建設業には高度な技術が不可欠ですが、その技術を生み出し、継承し、発展させるのは人です。だからこそ採用、教育、人材育成、エンゲージメントの向上に力を入れています。これからも社員が成長を実感できる会社であり続けたいと思います。

受け継がれる企業文化

——不動テトラには大切にしている経営理念があり、経営理念を実現していくことがESG経営そのものと考えています。皆さんは日々の業務の中で、経営理念をどのように意識し実践していますか。

田中 私は経営理念の中でも、「あらゆる変化を進化に換えて未来に向かって歩み続けます」という言葉が好きです。変化に対応することはリスクが伴いますが、変化から逃れて成長できる時代ではなくなったのではないのでしょうか。変化を前向きに捉え、技術に対して誠実に、失敗を恐れず挑戦し続けることが大切です。成功だけではなく失敗からも学ぶという姿勢が不動テトラの信頼を支えていると思います。

林 現場で仕事に取り組む中で、常に自分が会社を代表しているという意識を持つようにしています。先輩からは「現場は会社の鏡だ」と教わりました。発注者とのやり取り、地域の方々への対応もすべて会社の評価につながります。だからこそ誠実であることを大切にしています。当社では「さん付け」運動を展開していますが、私も自分のことを「所長」と呼ばせないようにしています。たとえ年齢や役職が違って仲間として何でも話せる関係をつくりたいからです。「こんなことを言ったら否定されるかもしれない」などと思わせることなく、誰もが堂々と意見を言える環境をつくるのが大事だと考えています。

横路 中途入社で当初は建設業に関する知識はそれほどなかったのですが、周囲の人はとても丁寧に教えてくれま

した。「知らないことは何でも聞いて」という雰囲気がありました。特に印象的だったのは、上司から「失敗してほしい」と言われたことです。もちろん、積極的に失敗しろという意味ではなく、挑戦しないことが一番よくないということですが、その言葉は今でも忘れられません。

橋田 出向先にいるからこそ感じるのですが、社外から見た不動テトラは、非常に技術力が高く堅実な会社という印象を持たれています。先輩方が築いてきた信頼の重みを受け止めています。だからこそ、自分もその信頼を損なわないようにしなければと強く感じます。信頼は一朝一夕では築けません。日々の仕事を積み重ねる中でしか得られないものだと実感しています。一方で会社の中にいるとそれが当たり前になってしまうこともあります。私たちには信頼や技術を守るだけではなく、さらに伸ばしていく責任があります。若手世代として、先輩方が築いた企業文化を受け継ぎながら、新しい価値を生み出していかれたらと考えています。

弘 地盤改良の設計業務を担当していますが、最終的に構造物の安全性を左右する立場にあり、条件確認や技術的な検証の徹底を心掛けています。地盤改良は完成後の結果が見えにくい仕事ですが、私の手掛けた地盤の上で多くの人が生活するからこそ、見えない部分に責任を持つことが大切だと思っています。

林田 私は営業として全国のお客さまと接していますが、不動テトラに対して「真面目な会社」「誠実な会社」という評価をいただくことが少なくありません。それは技術だけではなく、先輩方が長年積み重ねてきた企業文化の結果だと思います。もちろん、真面目で誠実なだけではなく、社会環境が変わり続ける中で新しい技術に挑戦し続ける必要があります。その意味で不動テトラには誠実さと挑戦の両方が根付いていると感じています。

奥田 皆さんの話を聞いて、言葉は違っても全員が同じ方向を向いていることを感じました。誠実、信頼、挑戦が不動テトラの企業文化です。そして、今は上司が「ついてこい」と言うような時代ではありません。若手もベテランも関係なく、意見を出し合いながら会社をつくるべきです。私は、社員が失敗しないことよりも挑戦しないことが会社にとって大きな損失につながると考えています。

不動テトラは 社会に何を提供できるか

——気候変動やインフラの老朽化、人材不足など社会課題が複雑化する中で、不動テトラはこれからどのような価値を提供していくべきでしょうか。

橋田 私が出向している漁村総研（一般財団法人 漁港漁

場漁村総合研究所：JIFIC）では、漁港や漁村が抱える課題に日々向き合っています。インフラの維持管理だけでなく、人口減少や高齢化、地域社会の維持といった課題もあります。社会基盤を守ることは、人々の暮らしを守ることと同義だと実感しています。

林田 人手不足への対応は今後さらに重要になります。労働人口が減少する中で社会インフラを維持し続けるには、技術や仕組みを進化させなければなりません。省人化や生産性向上は社会に対する価値提供そのものだと思います。

横路 DXの役割はさらに大きくなると思います。工事成績の向上だけでなく、生産性向上や業務効率化にもつながります。不動テトラならではの3事業の連携を生かすことで、新しい価値を生み出せるのではないかと思います。

弘 地盤事業では自動化施工や遠隔施工の研究が進んでいます。将来的には一人の技術者が複数の現場を支援できるようになるかもしれません。これは人材不足への対応だけでなく、多様な働き方の実現にもつながります。

田中 研究所では3事業が持つ技術を横断的に活用する取り組みを進めています。具体的には、流体解析を地盤改良に適用したり、地盤材料・機械の知見を先端技術開発に活用したりしています。これまで別々に蓄積してきた技術を融合することで、新たな価値を生み出せると考えています。

奥田 私たちが手掛ける本業そのものが社会課題の解決につながります。防災・減災、国土強靱化、インフラの維持更新は、すべて私たちの仕事と直結しています。さらに今後は、GXやブルーカーボン、環境負荷低減への取り組みが重要になります。土木事業、地盤事業、ブロック環境事業それぞれが持つ技術を生かしながら、カーボンニュートラルや自然共生社会の実現にも貢献していきたいと思っています。

10年、20年後の不動テトラ

——皆さんが会社の経営を担うようになる10年後あるいは20年後の不動テトラはどのような企業であるべきでしょうか。その未来に向けて今なすべきことは何だと思いますか。

田中 既存技術を磨くだけではなく、3事業の知見をさらに融合し、新しい事業や技術を生み出すことが必要になると考えています。それが社長も言われている将来の4本目の事業の柱につながっていくのではないのでしょうか。技術開発の分野から見ると、これからの10年は従来以上に変化の大きい時代になると受け止めています。気候変動やカーボンニュートラルへの対応、インフラ老朽化、人手不足など、社会から求められるテーマはますます複雑になります。しかし、私はそうした変化を前向きに捉えています。不動テトラには3事業があり、それぞれに長年培った技術があり

ます。それらを融合することで、これまでになかった技術やサービスを生み出せる可能性があります。合併から20年を経て、ようやく融合の成果を本格的に発揮できる時期に入ったのではないのでしょうか。次の10年では、その強みをさらに発展させ、新しい価値創造に挑戦していきたいと思っています。

橋田 不動テトラがこれからも信頼される会社であってほしいと思っています。今後、防災・減災や環境保全など、社会課題はさらに複雑になります。その中で技術を通じて価値を提供できる会社であり続けてほしいです。そのためには技術開発を止めず、新たな価値を提供し続けることが必要だと考えています。

林 風通しのよい組織であり続けることが大切だと思います。若手でも自由に意見が言える環境があれば、新しいアイデアや技術が生まれます。まずは社内のコミュニケーションを大切にしたいです。

横路 挑戦を歓迎する会社であってほしいと思っています。失敗を恐れず挑戦できる環境があるから成長できる。その文化を次の世代にも受け継いでいきたいです。

弘 これからの10年は多様性がさらに重要になると思います。性別や国籍によらず多様な人材が活躍できる会社になってほしいです。20年後には、「女性技術者」という言葉自体をなくしてほしいです。性別に関係なく誰もが活躍できる会社になっていてほしいと思います。

林田 私は一言で言うと「チャレンジ」だと思っています。社外に対しても、社内に対しても、新しいことに挑戦し続ける会社であり、自分自身もそうありたいと考えています。

奥田 今日の皆さんの話を聞いて、次の世代へ安心してバトンを渡せると感じました。10年、20年後の未来に向けて、現在の経営トップである私に課せられた責任は3つあると考えています。1つ目は、社員が心身ともに健康で安心して働ける環境を整えること。2つ目は、失敗を恐れず挑戦できる機会を提供すること。そして3つ目は、「不動テトラで働いてよかった」と社員が誇りを持てる会社にすることです。2018年度にスタートした長期計画は2027年度で終了となりますが、それは不動テトラにとっての最終ゴールではありません。むしろ次のステージに向けた出発点です。これまで築いてきた3事業の強みを生かしながら、新たな価値創造に挑戦していかなければなりません。一方、社員の家族にも誇りに思ってもらえる会社であるために、業績だけではなく、社会に必要とされる会社とすることが求められていきます。そのためにも未来への投資を続けます。これからも技術と信頼を磨き続け、社会課題の解決に挑みながら、新たな価値を創造していく方針です。そして、10年、20年後にも「この会社で働いてきてよかった」と胸を張って言える企業にしていきたいと考えています。



代表取締役社長
奥田 真也
1980年不動建設株式会社に新卒採用



総合技術研究所
技術戦略室 技術戦略グループ
田中 真史
2004年株式会社テトラに新卒採用



東京本店 土木工事部 工事課
林 純一
2006年不動建設株式会社に新卒採用



北関東支店 営業部 営業課
林田 敏彦
2007年株式会社不動テトラに新卒採用／
合併後初の新卒採用



一般財団法人漁港漁場漁村総合研究所
橋田 雅也
2016年株式会社不動テトラに新卒採用／
2023年に社外出向



土木事業本部 工事部 工務課
横路 成美
2016年株式会社不動テトラに中途採用



大阪支店 地盤研究室
弘 楓
2017年株式会社不動テトラに新卒採用